

## 中学校の部

### 特選 自由図書部門

「自信を持つこと」

揖斐川町立谷汲中学校一年

河村 知樹

「どうせ僕にはできない」それが僕の口ぐせだった。そんな僕が変われたのは、この本とであつたからだ。

主人公の外村は調律師。高校生の頃ある調律師と出会い、ピアノから奏でる音に魅了され、自らもそうなりたいと調律師を目指し始めた。しかし、まるで森の中をさまようような修行の日々。その森をどう歩けばいいのか、目的地はどこにあるのかと迷い続ける。それでも、ひたすら音と人に向き合い、理想の音を追求していく姿がとても印象的だった。

僕の家にも半年に一度、グラランドピアノの調律をするために調律師さんが来てくれる。一音一音を丁寧に黙々と調律していくのを見て、とても繊細な仕事だと知つた。

この本と出会つたのは半年前。小学校卒業式での、合唱の伴奏をするか迷っていた時だ。

伴奏をするか迷っていたのには理由がある。

僕の姉はピアノコンクールに出場すればいつも入賞するし、伴奏もしている。でも僕は、予選を通過することが精一杯で、伴

奏もしたことがない。上手に弾く姉をすごいと思っているが、いつも姉と比べられているような気がして嫌だった。いつからか、自分にはピアノを弾くことが向いていないのかなと思うようにもなつた。だから「どうせ僕にはできない」と言い、人前で弾くことを避けてきた。

そんな僕が伴奏をしようと決めたのは、三つの言葉に背中を押されたからだ。

「根気」「度胸」「あきらめ」調律が上手くいかなかった外村に、先輩がアドバイスした言葉である。

「根気」僕はピアノを毎日は弾かない。練習していても、思うように弾けないとやめてしまう。でも、上達するにはコツと根気よく努力することが大切なのだ。

「度胸」僕は間違えたらどうしようと不安で、勇気が湧いてこない。でも、一步踏み出して挑戦しなければ、何も始まらない。

「あきらめ」ここでのあきらめとは、投げ出してしまうことではない。やってみて、もしできなかったり失敗してしまつたときは、気持ちを切り替えたり、次はどうしたら良いのかと機転を利かせ、前に進むことだ。

僕は毎日練習した。何度弾いてもうまくいかない箇所は、ピアノの先生に弾きやすいようにアレンジしてもらつた。音楽の授業で初めて伴奏をした時、やはり不安でいっぱいだったが、そんな気持ちはすぐに吹き飛んだ。クラスの皆が僕

の伴奏に合わせて歌ってくれたことに、とても感動したのだ。しかも、友達や先生が「すごいね。よく頑張ったね。」と声をかけてくれて、とても嬉しかった。努力すれば僕にもできるのだと、自信を持つことができた。そして、僕がこの言葉に出会わなければ、伴奏をしていなかっただろうし、こんなに嬉しい思いや、達成感を味わうことはなかった。言葉の持つ力の大きさを実感した。

色々な人の様々なピアノを調律していく中で、外村には感じたことがあった。ピアノには一台ずつふさわしい場所があつて、そのピアノから奏でる音楽は誰かと競うようなものではない。多くの人にとっては価値のないものでも、誰か一人にとってはかけがえのないものになる、と。

僕は共感した。僕の伴奏は上手ではないけれど、先生や校舎、家族への感謝の気持ちを込めて引くことができた。そして何よりも、小学校生活を共に過ごしてきた仲間との合唱の伴奏ができたことは、僕にとってかけがえのない経験になったのだ。

「何もないと思っていた森で、なにもないと思っていた風景の中に、すべてがあつた。」

外村が自分の思い描いていた調律ができたときに、気付いたことである。森の中をさまよい、大変なことも、不安になることも沢山あつた。でも、その経験をしたからこそ今があつて、無駄なことは何一つなかったのだ。

この本から、不安を乗り越えるために必要なものは経験なの

だと学んだ。

僕は、入学してすぐに学級委員になった。中学校生活がどんなものなのかもわからず、不安でいっぱいだった。今も不安だ。でも、始めから自信なんて持てるわけがない。経験を積み重ねていくことで、少しずつ自信が持てるようになるのだ。より良いクラスにするために、僕にできることは何なのか考え、二つのことに取り組んでいこうと決めた。一つ目は、クラスというのには皆で作りに上げていくものだから、一人一人の声に耳を傾けること。二つ目は、学校生活が楽しいと皆に思ってもらいたいから、常に笑顔で話し、相手が元気になるような言葉をかけていくこと。

失敗しても成功しても、その経験が宝物になり、僕を成長させてくれるはずだ。僕ならできると信じて、一つ一つのことに全力で取り組んでいきたい。

宮下 奈都 作

『羊と鋼の森』 文藝春秋

#### 【講評】

自分の心の内面を見つめ、本の中に登場するキーワードと共に振り返ってありました、仲間や本の中の言葉から勇気をもらい、これからの自分を生かしていこうとする前向きな姿が表わされていて心に響き



イラスト

『○○○○』  
○○○○  
○○○○  
○○○○  
書店 作

講評 (100字程度・よさを中心に)